

ヒブ(Hib)による感染症について

ヒブは、正式にはインフルエンザ菌b型という細菌で、発見された当時は、インフルエンザの原因と考えられていたためにこの名前がつけられましたが、冬季に流行するインフルエンザとは関係ありません。

ヒブは、せきやくしゃみなど飛沫を介して感染し、鼻咽腔に保菌され体内に侵入しますが、そのほとんどは無症状保菌者となり症状は起こしません。しかし、一部の人では、増殖した菌が血液の中に入り込み、髄膜炎や敗血症などの侵襲性感染症を起こす場合があります。

感染症発生動向調査によると、インフルエンザ菌が原因として報告された細菌性髄膜炎患者の年齢分布は、5歳未満に多く、ピークは生後8か月で、6歳以上では極めて稀でした。このことから、できれば生後6か月までに免疫を獲得しておくことが望ましいと考えられます。

ヒブ髄膜炎は、予後不良になる場合が多く、約5%が死亡し、てんかん、難聴、発育障害などの後遺症が約25%に残ります。初期症状は発熱、嘔吐、けいれんなどで、急性呼吸器感染症や他の疾病と症状が類似しているため早期診断が難しく、また近年抗菌薬への耐性化が進んでおり治療が困難となっています。

ヒブ(Hib)ワクチンについて

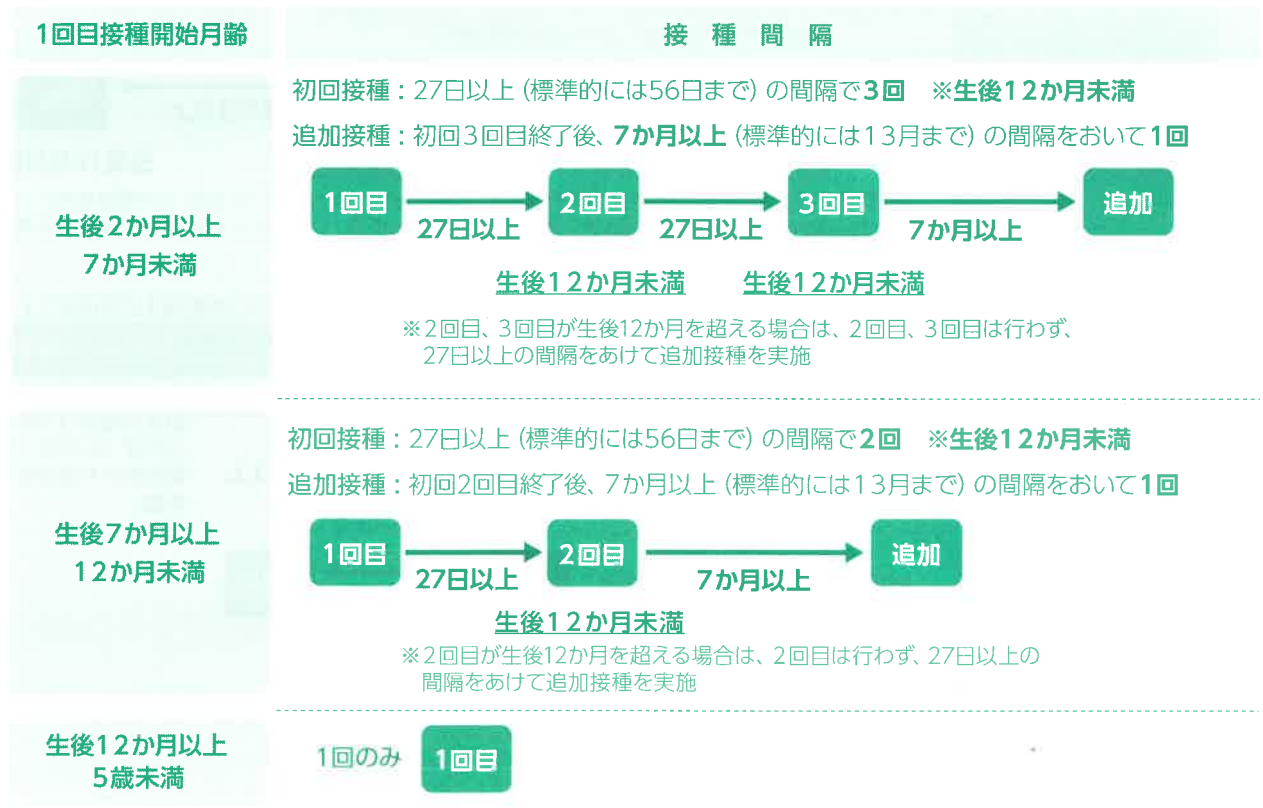
インフルエンザ菌b型による感染症、特に侵襲性感染症(髄膜炎、敗血症、蜂巣炎、関節炎、喉頭蓋炎、肺炎および骨髄炎など)を予防するワクチンです。インフルエンザ菌b型から精製した莢膜多糖体(ポリリボシルリビトールリン酸)と、破傷風トキソイドを共有結合した小児用の結合体ワクチンです。

副反応

副反応としては、局所症状として発赤、腫張、硬結、疼痛など、全身反応として発熱、不機嫌、異常号泣、食欲不振、嘔吐、下痢、不眠、傾眠などが認められています。重い副反応として、非常にまれにショック、アナフィラキシー、けいれん、血小板減少性紫斑病が報告されています。

対象者及び接種スケジュールについて

生後2か月以上5歳未満(5歳の誕生日の前日まで)
※対象年齢を過ぎると、公費での接種は受けられなくなります。
※2回目以降の接種は、ワクチンを接種した日の翌日から起算してください。



接種時に持参するもの

- ① ヒブワクチン接種予診票
- ② 母子健康手帳(接種歴を確認するとともに、予防接種を受けたことを記録します。)